共通の運命・異なる人生
-中国イスラム指導階層のライフヒストリーからみる革命と社会変化-

王建新

はじめに：本研究の学術背景、目的と内容

特定の人物及び家族の生活史を材料に用いて社会文化の研究を行う人類学の流れは、1920 年代末に始まった（Langness1981）。人類学のイスラム研究は、相当の遅れが見られ 70 年代末から本格的に始動したと言えるが、画期的な著作が輩出するほど(Crapanzano 1980、Eickelman 1985、Antoun 1989 などはその典型例）となった。私自身も、ある程度この手法を利用してウイグル族における宗教教育と社会変化の研究を行った（2004）。

この研究の目的は、社会人類学における生活史資料は社会変動の様相を反映するという理念や、中国イスラムにおける超地域的宗教文化の関わりなどの視点から出発し、研究対象とされてこなかった、河南省から新疆ウイグル自治区まで四つのムスリム社会を背景にし、それぞれ一人のイスラム宗教指導者の生活史を取り上げて、中華人民共和国建国後の 50 数年間の社会変動と彼らの社会地位及び役割について比較と分析を行い私なりの方法を提示したい。

Ⅰ．四人のイスラム指導者のプロフィール

1．汪守天

1925 年、甘粛河州唐汪川で農民の家に生まれ、霊明堂二代目教主陝子久の弟子
1953 年、三代教主となる
1957 年、宗教改革運動
1966 年、文化大革命時期
1984 年、五星坪道堂の建設開始
2005 年、道堂ほぼ完成、霊明堂の空前発展

2．馬仁普

1910 年、河南偃师馬屯回族農民の家に生まれ
1932 年、故郷を離れて寧夏固原で羊の毛皮交易、霊明堂二代目教主陝子久の弟子
1941 年、故郷から移住の馬姚姓親族 18 世帯の世話人で明月堂設立、共同体生活開始
1950 年、共同体生活停止、宗教指導者だけとなる
1958 年、宗教改革運動で反動組織のリーダとして逮捕、投獄
1960 年、牢獄死、享年 50 歳
1996 年、遺骨が固原三営の霊明堂分堂の施設内に移され、道統のシンボルとなる

3．馬光普

1910 年、河南偃师馬屯回族農民の家に生まれ、馬仁普の父方従兄弟
1920 年、黄埔軍校で勉強とも言われ
1930-40 年、山東省に駐屯していた国民党軍隊の将校
1949 年、部下を率いて解放軍に入った後に、復員、政府の幹部となる
1956 年、反右派運動で批判され停職となる
1960 年、従兄弟の牢獄死にも影響され、公職を辞め故郷に戻りイスラムの勉強
1970 年代、雲南の“沙甸事件”に関係し逮捕

1979 年、名誉回復の後に偃师馬屯村に戻り、霊明堂の教えを広げる

1996 年、故郷で逝去

4. Ismayil Tokhti

1935 年、新疆トルファン県ヤルバシ村の役人の末子として生まれ

1943 年、8 歳よりバグリ・マドラッサというイスラム宗教学院に入学

1950-56 年、村の識字班の教員であった、後に旧役人の息子とされ村人に敬遠される

1957-78 年、社会主義運動のなかで悪ものにされないようと、宗教の勉強をやめて村の仕事で懸命に働き、村の会計掛となっていた

1980 年、村人の要請と政府の許可を受けて、村モスク導師として働くようになる

1989 年、10 年間の猛勉強と宗教サービスの末、行政村全体の説教師となる

Ⅱ. 1949 年前の地域社会とイスラム指導階層

1. 蘭州市の為政者とイスラム神秘主義教団
2. 河州唐汪川の民族と宗教
3. 固原三営と偃师馬屯の指導者階層
4. トルファン盆地の階級社会とアホンたち

小結：1940 年代末までのイスラム知識階層は、民族や地域と関係なく高い社会的地位についていた、民衆と政府の架け橋としても、自らが政府官僚になったりもして、経済と政治の両方に恵まれて、社会の上流階級として活躍していた。

Ⅲ. 社会主義革命のなかのイスラム宗教知識人

1. 建国初期の状況
2. 1957 年の宗教改革
3. その後の変化

小結：1957-77 年の 20 年間は、回族もウイグル族においても、イスラム宗教指導者たちは、最悪の年月を過ごすこととなった、改造を拒んだ結果で牢獄死に至ったりするが、運がよく難を逃れるか、自ら積極的に革命の陣営に身を投じることで安全の生活を手にいれたりすることもあった。

Ⅳ. 改革開放の時代を生きるイスラム宗教権威

1. 汪教主と霊明堂教団の再建
2. 馬仁普遺骨の神聖化
3. 馬光普死後の馬屯村
4. Ismayil のイスラム教え

小結：彼らの四人は、同じ運命を強いられた社会変動のなかで、異なる人生の道を歩み、それぞれで違う形で対応をとってきたが、結局、再びイスラム信仰の道に入り、伝統文化復興の担い手かシンボルとして活躍するようになった。

終わりに：現代中国における社会変化と伝統文化

1. 社会変化は、地域、民族及び個人によって様相が異なるが、伝統文化とされるイスラム信仰はそのまま維持されているか、大きいな発展さえ可能となった。

2. イスラム指導者の個人的経験ではあるが、彼らの人生の経験を社会現実と照らしてみると、実にさまざまな歴史事実や人々の対応、そして変化のあり方が分かる。

3. 超地域的宗教文化論の視点は、中国イスラムへの人類学の思考に、特に社会変化と伝統文化との関わりへの考察と理解には、より大きな可能性を与えられるのであろう。

参考文献

Antoun Richard T., Muslim Preacher in the Modern World: A Jordanian Case Study in Comparative Perspective. Princeton University Press, 1989

Crapanzano, Vincent, Tuhami: Portrait of a Moroccan. University of Chicago Press 1980

Eickelman, Dale F., Knowledge and Power in Morocco: The Education of a Twentieth-Century Notable (Princeton Studies on the Near East) . Princeton University Press

Langness, L. L. and Gelya F. Franks, Lives: An Anthropological Approach to Biography. Chandler and Sharp Publications, 1981

Wang Jianxin Uyghur Education and Social Order: The Role of Islamic Leadership in the Turpan Basin. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所イスラム文化叢書 76 集, 2004

王建新、「中国ムスリム女性の民間教育」加藤博編『イスラームの性与文化』東京大学出版会、共著、2005、pp. 127-154

------、「中国イスラムの親族と地域社会-霊明堂固原分堂の事例を中心に-」庆应大学日吉紀要「言語、文化、コミュニケーション》第 32 期、2004、pp. 21-40

------、「新疆ウイグルのシャマニズム-イスラムの現代を生きる民間信仰日-」渡边欣雄編『アジア遊学・路地裏の宗教』第 58 期、勉诚出版、2003、pp.144-152

------、「西北地域の回族-経済发展のなかの民族と宗教」佐々木信彰編《現代中国の民族と経済》世界思想社、2001、pp.209-238